

『怒りのぶどう』におけるジム・ケイシーの内的発展について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重松, 宗育 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008655

『怒りのぶどう』における ジム・ケイシーの内的発展について

重 松 宗 育

1939年に出版されたジョン・スタインベックの代表作『怒りのぶどう』は、出版当時のアメリカにおいては、現実暴露のプロレタリア小説として受けとられ、各地にセンセーショナルな反響を巻き起こした。確かに、1930年代の大不況の時代の中で、「黒い大吹雪」によって土地を奪われた農民たちが、カリフォルニアへ移住し職を得られないままに難民化してゆく、その悲惨な生活を直接の題材として取り上げた小説である、という意味では、当時流行のストライキ小説として読まれたのも、無理のないことであった。

しかし、当時の左翼文学作品の多くが、時と共に、泡沫のように消えて行った中において、何故にこの『怒りのぶどう』が、偉大な作品としての評価を守り続けているのであろうか。この答えは、至極簡単だ。この作品が、極めて高度な芸術性を備えた文学作品だったからである。そして、偉大な文学作品の多くの場合と同様、この作品にも、壮大な連峰のように、いくらでも登る道筋を見つけることが出来るのだ。つまり、この『怒りのぶどう』には、表立った社会抗議の他に、多様なテーマが潜在しているのである。

登場人物たちを例にとって見よう。一体、誰がこの小説の主人公なのか。タイトル裏に書かれた「この本を生きたトムに」という献辞と小説の中での表面的な役割から判断すれば、トム・ジョードを主人公と考えるのが妥当であろうし、著者スタインベックの信ずる「生物学的人間観」からすれば、たくましく一家を支えてゆくおっかあなのかも知れない。或いは、「集団人」の思想の視点から見れば、集団としてのジョード一家そのものだ、と解釈しても不自然ではないであろう。

また、元説教師だったジム・ケイシーも、別の意味で主人公に匹敵する存在であろう。何故なら、ケイシーの人格と精神遍歴とが、間接的に、ジョード一家の人々を動かしてゆくからである。不幸にして、ケイシーは、小説の途中で不測の死を遂げる。だが、ケイシーが吐露した言葉は、彼の死の後も、トムに

受け継がれ、生き続けてゆくのである。

こうした主人公の問題だけでも、実際多面的な検討を要する。しかし、本論においては、大作『怒りのぶどう』のもつ多様なテーマについてはすべて別の機会に譲ることにして、ひたすらこのジム・ケイシーの人間性に焦点をあて、彼の精神遍歴のあとをたどってみたい。また、ケイシーの作品の中で果たした役割や他の登場人物に与えた人格的、思想的影響などについても、改めて論ずることにして、ここでは、魂の真実を求めた「考える人」ジム・ケイシーの内的発展のあとを具体的に検討しつつ、その軌跡を再構成することにした。

(1)

ジム・ケイシーは、かつて「火の柴」会派の牧師だった。だが、今はその職をやめて、教会の組織とは無関係な一求道者となって放浪生活をしている。そのケイシーは、たまたま、マッキヤレスターからわが家へ戻る途中のトム・ジョードに何年かぶりに出会ったのだ。語り合う相手を得たケイシーは、とどまるところを知らず自分の牧師職をやめるに至った事情を語る。

かつて、ケイシーは、牧師として人々から乞われるままに神の恩寵を説き、また当然と思われている牧師の職務を忠実に果たしていた。彼の説教は好評で、信者たちは大勢集会にやって来たものだった。だが、その一方で彼自身は、ある難題に直面し、秘かに苦悩していたのである。それは、人々に恩寵を説くまではいいのだが、そのあとで、決まって情欲という悪魔の誘惑に負けてしまうことであった。

“I says to myself, ‘What’s gnawin’ you? Is it the screwin?’
An’ I says, ‘No, it’s the sin.’ An’ I says, ‘Why is it that when
a fella ought to be just about mule-ass proof against sin, an’ all
full up of Jesus, why is it that’s the time a fella gets fingerin’
his pants buttons?’”
(Chap. IV, p. 31)¹

一方では、信者たちの魂を自分の手のひらに握っているという聖なる使命感と責任感、他方では、娘を草むらへと連れ出さずにおれない邪な性の衝動、こうした二極に分裂した自己、偽善者である自己に対する嫌悪の自覚——これがケイシーの真の求道者としての人間探求の始まりであった。

けだし、すべての人間洞察は、内なる善への傾向と悪への傾向との葛藤、即ち理性と情欲、神性と獣性、この人間存在の二重性を凝視し、自己の存在の有

様を冷徹な眼をもって省察することから始まる。

それ故、二重性をもった醜悪なる自己に懷疑を抱き、また、自らの牧師の務めを、ただそうするものとみんなが思っているからやっているだけの話、としてきた自己に疑問を覚えたケイシーに、こうして人生の一大転機が訪れることになるのである。

ケイシーは、一人荒野へと逃げ出し、思索を重ねた。そして、その苦悶の中から、次第にみずからの抱いた疑問に対する手がかりを見出すことになったのだ。

‘Maybe it ain’t a sin. Maybe it’s just the way folks is. Maybe we been whippin’ the hell out of ourselves for nothin’.’ (IV, 31)

人間が、本来二重性をもって生まれついているのなら、何故にそれほどまでに自己を責めさいなむ必要があるのか。人間の悪への傾向のみ過大視して、罪／＼と叫ぶのは一種のマゾヒズムに違いない。それは「自分で自分を傷つけるのが好きな」² 連中に任せたらよい。真実を求める者は、そのような安易さに溺れてはならぬとケイシーは考えたのだ。

‘The hell with it! There ain’t no sin and there ain’t no virtue. There’s just stuff people do. It’s all part of the same thing. And some of the things folks do is nice, and some ain’t nice, but that’s as far as any man got a right to say.’ (IV, 32)

罪だとか徳だとか、そんなものは人間があとからつけた単なる名前にすぎない。元を正せばみんなある一つの「同じもの」のあらわれなのだ。ハムレットが言っているように、所詮「ものの善し悪しは、すべて見る人の心次第」なのだ。そこに人間がいて、「ただ人間のやることがあるだけ」なのだ。

そうだとしたら、すべては人間の心のあり方にかかってくる。その故にこそ、ケイシーは自らの心に問うたのである。

‘I figgered about the Holy Sperit and the Jesus road. I figgered, ‘Why do we got to hang it on God or Jesus?’...’ (IV, 32)

何かと言えば、すぐ「神様は……」——これこそ宗教がドグマチズムに墮し、

形骸化に陥った姿である。そこでは、人間の側の努力は放棄され、責任はすべて神に転化される。神は神、人は人、へと分裂し、本来両者の間にあるべき精神の緊張が失なわれる。この人間と神との断絶現象は、人間の側の精神性が希薄化し、もはや人間のための宗教ではなくなった状態である。宗教の真実な形においては、神もキリストも正に人間精神のあらわれに他ならないし、また人間にとっての神とは、人間の精神的充実の極に達した状態の別名でもあるからだ。

そうだとすると、こうして内に絶え間なく起きてくる精神的緊張は一体何なのか——この疑問を解決するために、ケイシーは、更に自問自答を続けてゆく。

“I says, ‘What’s this call, this sperit?’ An’ I says, ‘It’s love. I love people so much I’m fit to bust, sometimes.’ An’ I says, ‘Don’t you love Jesus?’ Well, I thought an’ thought, an’ finally I says, ‘No, I don’t know nobody name’ Jesus. I know a bunch of stories, but I only love people. An’ sometimes I love ’em fit to bust, an’ I want to make ’em happy, so I been preachin’ somepin I thought would make ’em happy.’...” (IV, 32)

自分が本当に求めてきたものは人間を愛すること以外にない、とケイシーは自覚したのである。イエスはイエス、もちろん無視する訳ではない。だが、既成のドグマに縛りつけられた、信仰の対象としてのイエスのことなど、たとえその「話はどっさり知ってい」ても、ただそれだけでは何の意味もない。自分が「胸がはちきれんばかりに」愛したいと思うものは、そんな彼方の断絶した存在ではなくて、即今、ここに温かい血の脈打つ生身の人間そのものなのだ、とケイシーは気付いたのである。

そして、真摯な思索の繰り返しの末やっと到達したケイシーの結論は、次のようなことであった。

I figgered, ‘maybe it’s all men an’ all women we love; maybe that’s the Holy Sperit—the human sperit—the whole shebang. Maybe all men got one big soul ever’body’s a part of.’

(IV, 32-3)

実に、ケイシーのこの言葉こそ、この小説の思想的基盤なのだ。「おそらく、人間全体が一つの大きな魂をもっていて、一人一人がその魂の一部なのにならぬ」

えねえ」——この汎神論哲学は、F. I. カーペンターの指摘した通り、エマソンの思想の中核をなす「大霊」“The Over-Soul”の思想に他ならない。³そして、こうしてケイシーが「赤裸々な正直さ」⁴をもって語った言葉が、のちにトムやおっかあなどジョード家の人々の行動や生き方を規定してゆくことになるのである。

個々の人間の魂は、それ自身絶対的個であると同時に、人類全体の大なる魂の一部分でもある。「魂」を「生命」に変えてこのことを敷衍すれば、この世界にまず原初的な大なる生命の塊があって、個々の人間の生命活動は、すべてその顕現したものだということになる。⁵即ち、人間のあらゆる行為は、先にも述べたように、善と名付けられようが悪と名付けられようが、すべてその大なる生命の塊の一部分なのだ。そして、個々の存在は、切り離された孤立したものではなく大なる全体の一部なのだ、という文学的真実を、更に個人と社会との関係で言えば、個人個人は、それ自体独立した唯一絶対的存在であると同時に、人類社会という全体の中の一部でもあるのだ。これを積極的に解釈すれば、個々の人間はばらばらに孤立すべきではなく、独立しつつ、かつ他の個々の人々との連帯を築きあげるべきなのだ、という主張に発展する。そして、この考え方が、のちにストライキの指導者としてのケイシーを生み出してゆくことになるのである。

ケイシーがトムに再会するまでの、苦渋に満ちた彼の精神遍歴は以上のようなものであった。

(2)

トムに再会し、自らの真理探求の体験を告白したケイシーは、事の成り行きでトムの家族を訪ねることになり、トムの家にやって来たが、ジョードの家族は誰一人見当たらなかつた。その代わりに、浮浪者生活をしていたミューリー・グレーヴスがひょっこり現われ、二人は彼から事情を聴くことになる。

ミューリーの説明によれば、この地方にも大砂嵐が起こって農作物は全滅し農地は砂丘と化して、地主たちは土地を整理するためにトラクターで小作人を農地から追い出した、というのだ。土地を追われた小作人たちは、仕事を求めて、続々と西の方カリフォルニアへ向っており、ジョードの家族もカリフォルニアへの旅立ちの準備をしているところだと知らされる。こうしたミューリーの話を知っているうちに、ケイシーの心に一つの問題意識が芽生え始めたのである。

“I gotta see them folks that’s gone out on the road. I got a feelin’ I got to see them. They gonna need help no preachin’ can give ’em. Hope of heaven when their lives ain’t lived? Holy Sperit when their own sperit is downcast an’ sad? They gonna need help. They got to live before they can afford to die.” (VI, 71)

以前から、ケイシーは、「天国の希望」や「聖霊」などが安易に説教されることに少なからぬ疑問を感じてきたのだが、その疑問は間違いではなかった。自分の考えの通り、やはり説教は、人々の現実生活に即したものでなければならぬのだ。そして、かつての小作人仲間であったウィリーが、トラクターに乗って自分たちを追い出しに来た、という話をミューリーが物語った時、ケイシーは、今や人々が何やら得体の知れない巨大な網の中に追い込まれてしまったことに気付き、彼の疑問は一つの頂点に達したのである。

Jim Casy had been staring at the dying fire, and his eyes had grown wider and his neck muscles stood higher. Suddenly he cried, “I got her! If ever a man got a dose of the sperit, I got her! Got her all of a flash!” (VI, 75-6)

それでは、一体ケイシーが「つかめえた」ものは何か。ただ、残念なことに、それは言葉で表現出来ないものであった。

“...I think I got her now. I don’ know if I can say her. I guess I won’t try to say her—but maybe there’s a place for a preacher. Maybe I can preach again. Folks out lonely on the road, folks with no lan’, no home to go to. They got to have some kind of home. Maybe—” (VI, 76)

こうして、聖書の教理を口真似して繰り返すことを放棄していたケイシーも、真に人々の精神的支柱となるべき真実を模索する求道者、エマソンのいわゆる「考える人」としてのみずからの使命を、ようやくここに見出すことになったのである。また、視点を変えれば、このケイシーの覚醒を誘発したものは、一つにはミューリーの語った言葉であったと言ってもよからう。つまり、腹を空かせていたトムが、ミューリーに白尾うさぎを乞うた時、ミューリーはこう答えているのだ。

Muley fidgeted...“ what I mean, if a fella’s got somepin to eat an’ another fella’s hungry—why, the first fella ain’t got no choice. I mean, s’pose I pick up my rabbits an’ go off somewheres an’ eat ’em. See?” (VI, 66)

この言葉は、ケイシーに大きな示唆を与えた。大なる魂を互いに分かち合っておればこそ、個々の人間は、困難に直面している他者に対して手を差し伸べることが、至極当然なのだ。つまり、弱き者同志は、連帯しなければならないのである。

“I can see that. Muley sees somepin there, Tom. Muley’s got a-holt of somepin, an’ it’s too big for him, an’ it’s too big for me.” (VI, 66)

この弱者同志の連帯と相互扶助という理念と、ミューリーの語るオクラホマの農民たちの現実とを関連づけることを、「でっかすぎる」問題だとケイシーは感じた。だが、このミューリーとの再会、そして突然の覚醒体験によって、ケイシーはジョード一家と共に旅立って、土地を追われた移住者たちの窮状を見極めようと決心したのである。

“Yeah, I’m goin’ with you. An’ when your folks start out on the road I’m goin’ with them. An’ where folks are on the road, I’m gonna be with them.” (VI, 77)

その晩は、ジョン伯父の所まで行くのを諦め、三人は近くの洞穴で夜を過ごすことになった。だが、「考える人」ケイシーには、眠る余裕などあろうはずがなかった。

“I ain’t sleepin’,” said Casy. “I got too much to puzzle with.” He drew up his feet and clasped his legs. He threw back his head and looked at the sharp stars. (VI, 82)

「鋭い星」——それは紛れもなく、彼の精神状態の見事な象徴であった。

(3)

翌朝、ケイシーは、トムに従ってジョン伯父の家を訪れる。たまたま、一家は朝食の前で、ばあさまにお祈りをせがまれたケイシーは、すでに説教師をやめた旨を告げるのだが、結局困惑しつつも引き受けざるを得なくなる。だが、今のケイシーは、家族の皆知っている、以前のケイシー牧師ではなかった。実に、その「説教師の顔には、祈りの表情ではなく思索の表情があり、その声の調子には、祈願ではなく、推量の響きがあった」⁶のである。その時ケイシーの語った言葉は、最早、文切り型の説教には程遠い、彼自身の存在の底から湧き出た言葉であり、それは、真実を求める一求道者の模索から覚醒への内的体験の告白であった。

“But I got tired like Him, an’ I got mixed up like Him, an’ I went into the wilderness like Him, without no campin’ stuff. Nighttime I’d lay on my back an’ look up at the stars; morning I’d set an’ watch the sun come up; midday I’d look out from a hill at the rollin’ dry country; evenin’ I’d foller the sun down. Sometimes I’d pray like I always done. On’y I couldn’ figure what I was prayin’ to or for. There was the hills, an’ there was me, an’ we wasn’t separate no more. We was one thing. An’ that one thing was holy.”
(VIII, 110)

この丘との合一体験は、ケイシーの思想の核をなす、特筆すべき体験である。「丘があって、おれがいる」そして「おれたちは一つになってい」という体験は、エマソンをはじめとする、アメリカ超絶主義の伝統に立つ体験である。⁷個が絶対的個でありながら、同時に全体の一部であると実感するこの体験は、先のケイシー自身の「人間全体が一つの大きな魂のかたまりをもっていて、一人一人がその魂の一部分なのにちげえねえ」という推論を、体験的に裏付けるものである。そして、この体験を、人間と社会という視点に移して、ケイシーは更に説明を続ける。

“...I got thinkin’ how we was holy when we was one thing, an’ mankin’ was holy when it was one thing. An’ it on’y got unholy when one mis’able little fella got the bit in his teeth an’ run off his own way, kickin’ an’ draggin’ an’ fightin’. Fella like that

bust the holiness. But when they're all workin' together, not one fella for another fella, but one fella kind of harnessed to the whole shebang—that's right, that's holy....” (VIII, 110)

だが、こう言ったあとでケイシーは、「神聖」という言葉を使ってはいるが、まだ自分自身でもよく分っていないと告白している。しかし、ケイシーの言葉は、明らかに徐々ではあるが、一つの方向に向かって、深化し、実体化しつつあり、そばで聞いているおっかあには、ケイシーがまるで「突然一つの霊になってしまったかのように、もはや人間ではなく、地底から響いてくる声でもあるかのように」⁸ 思えたのである。そして、カリフォルニアへの旅立ちを目前にしたジョード一家に同行したい旨を申し出て、「どちらにせよ、おれは出かけるつもりだ」と、その決意の程を語ったのだ。何故か？

“I'll go anyways,” he said. “Somepin's happening. I went up an' I looked, an' the houses is all empty, an' the lan' is empty, an' this whole country is empty. I can't stay here no more. I got to go where the folks is goin'. I'll work in the fiel's, an' maybe I'll be happy.” (X, 127)

そして、続けて、

“...I'm gonna work in the fiel's, in the green fiel's, an' I'm gonna be near to folks. I ain't gonna try to teach 'em nothin'. I'm gonna try to learn...Gonna lay in the grass, open an' honest with anybody that'll have me. Gonna cuss an' swear an' hear the poetry of folks talkin'. All that's holy, all that's what I didn' understan'. All them things is the good things.” (X, 127-8)

かくして、ケイシーがみずから築きあげた思想と体験とを、現実の社会の中で生かしてゆく道は定まった。そしてジョード一家も家族会議を開いて、ケイシーの同行の希望を受け入れることになり、こうしてケイシーは、ジョード家の人々と共にカリフォルニアへ向かうことになったのである。

(4)

ペイドン近くのガソリンスタンドに水を補給するために立ち寄った折りに、

その主人に向かつて、ケイシーはこう言った。

“Here’s me that used to give all my fight against the devil ’cause I figgered the devil was the enemy. But they’s somepin worse’n the devil got hold a the country, an’ it ain’t gonna le go till it’s chopped loose....”
(XIII, 175)

この言葉を見ても、すでにケイシーの関心が、聖書本来の自己の内なる「悪魔」の問題から、社会全体を覆っている「悪魔よりもっと悪いもの」の解明へと傾斜しつつあることが分かる。今は、個人の内から外なる社会へと眼を転じなければならぬ時だ、とケイシーは痛感したのである。

そして、ジョード一家はベサニーの町を抜けたあたりで、旅に出て最初の不幸に見舞われた。自分の土地を離れることをかたくなに拒み続け、果てに眠り薬を飲まされて連れて来られたじいさまが、ついに卒中で死んだのだ。そこで再びケイシーはお祈りを頼みこまれ、心ならずも頭を垂れ、お祈りを始めた。

“...An’ I wouldn’ pray for a ol’ fella that’s dead. He’s awright. He got a job to do, but it’s all laid out for ’im an’ there’s on’y one way to do it. But us, we got a job to do, an’ they’s a thousan’ ways, an’ we don’ know which one to take. An’ if I was to pray, it’d be for the folks that don’ know which way to turn....”

(XIII, 197)

ここでケイシーは、自分の見解を明解に述べている。「生きているものはすべて尊い」のだ。「天国の希望」を説くよりも、「悪魔よりもっと悪いもの」に取りつかれている現実の社会の中にあって、しいたげられ途方にくれている人々に、今何を為すべきか、を語りかけることこそ真実を求める者の義務だ、とケイシーは信じているのだ。

そして、ケイシーは、この「悪魔よりもっと悪いもの」は、個人の全体性をも奪うものだと考えた。実際、大なる生命の一部分からなる個々の人間が、自分に与えられた生命を最大限に燃焼させるためには、個々の人間が自己自身を分裂させてはならないのだ。自己の全体性をそこなわせるものこそ、本当の敵なのだ。人間の統一性が失われると、それは致命的となる。ちょうどじいさまがそうであったように。

“It’s just the same thing,” Casy said. “Grampa an’ the old place, they was jus’ the same thing.... I think he knowed it. An’ Grampa didn’ die tonight. He died the minute you took ’im off the place.”
(XIII, 199)

ケイシーはじいさまの行く末を見通していたのだ。じいさまには、あの古屋敷や土地と一体になっている時こそが、本来の姿だった。それ故、土地と屋敷から切り離された途端に存在の基盤を失なうのは、至極自然な成り行きなのである。この意味では、じいさまは、みんなが無理矢理「土地から連れ出したその時に」死んだとも言えるのだ。そして、それ故にこそ、人々の内なる全体性を脅かす巨大な魔手から如何にして身を護るかを説くことが自分に課せられた使命なのだ、とケイシーは感じたのである。

(5)

サンタ・ローザでペコス川を渡り、しばらく進んだ辺りで、アルの運転していたウィルソン夫妻の観光用車が故障をおこしてしまった。その車の修繕を手伝いながら、ケイシーは、再び情欲の悩みをトムに告白する。

“I’m all worried up,” Casy said. “I didn’ even know it when I was a-preachin’ aroun’, but I was doin’ consid’able tom-cattin’ aroun’. If I ain’t gonna preach no more, I got to get married. Why, Tommy, I’m a-lustin’ after the flesh.”
(XVI, 233)

この作品には、性的な言及が少なくない。しかしどの場合をとってみても、その基本に、性というものを大なる生命の活動の一部としてとらえる態度が一貫して見られる。そのために、卑猥な話題を取り扱いつつも、どこか大らかな印象があとに残るのだ。⁹

こうして、性の衝動に悩まされながらも、「考える人」ケイシーの面目は、この告白に続くトムとの会話の中に躍如としており、トムと対照的な性格が浮き彫りになっていて興味深い。

トムは、国全体を大きく変えてしまうような出来事が起こったとしても、自分はただ一步一步足を踏み出して歩くだけのことだ、と言う。仮に行く手をさえぎる柵が現われたら、その時はその時でただそれを乗り越えるだけのことだ、と言う。こうしたトムに対し、ケイシーは次のように言っている。

“It’s the bes’ way. I gotta agree. But they’s different kinda fences. They’s folks like me that climbs fences that ain’t even strang up yet—an’ can’t he’p it.”
(XVI, 237)

自分自身と「一つのもの」であった土地を捨てて西へ西へと群をなして進む移住者たち、その姿を凝視しているケイシーには、「よく耳をすましてみりゃある動きが、こっそり、かすかな音をたてて進んでゆく」¹⁰の音が聞こえて来るのだ。自分の進んで行く方向も知らず、また知ろうともしない人々に当然ふりかかってくるはずの逆境を、ケイシーは予見しているのである。

その日の夜、ジョード一家は近くのキャンプ地で宿泊することにした。そこで、カリフォルニアから戻って来たばかりだという、ボロをまとった一人の男の話によって、ジョード一家は初めて、カリフォルニアでの労働者たちのおかれた窮状を知ることになった。

雇い主は、必死になって仕事を求めている移住者たちに対して、雇用予定をはるかに越えた多くの人々に求人ビラを配り、勧誘する。そして、集まった者たちに向かって、予告したよりも低い額の賃金を示す。そうすると半数がその額に不満で立ち去るだろうが、飢死寸前の者たちはそれでも残り、その低賃金で働くことを承知するはめになる、というのだ。つまり「人間を多く手に入れば入れるほど、また、その人間がひもじければひもじいほど、……少ない賃金ですませることが出来る」¹¹そのカラクリを、そのボロをまとった男は説明する。ケイシーにとって、この男の話は貴重な示唆であった。低賃金で労働者を確保するためにとる雇用者たちの卑劣な常套手段。そして現実にそれを可能にするだけの失業者たちの群れ。その上、更に悪いことに、こうして自分たちのように、続々と西へと向かう移住者たちがいる事実。

“He’s tellin’ the truth, awright. The truth for him. He wasn’t makin’ nothin’ up.”
(XVI, 261)

男の言ったことは真実だ、とケイシーは思った。だが、今後ジョード一家や自分も、この男の話のように巨大な渦に巻き込まれてしまうのかどうかについては、ケイシーとしてもただ「分からねえな」としか答える術はなかったのだ。

そして、ニードルズで出会った親子二人連れも、やはり西から戻ってきたところだと言う。カリフォルニアでは、職を求める移住者たちは、「オーキー」と呼ばれ蔑まれている一方、百万エーカーもの大土地を所有し、あちこちに監

視人をおいて、自分は防弾装置のついた車を乗りまわしているような大地主もいるというのだ。それを耳にしたケイシーは、こう言った。

“If he needs a million acres to make him feel rich, seems to me he needs it 'cause he feels awful poor inside hisself, and if he's poor in hisself, there ain't no million acres gonna make him feel rich, an' maybe he's disappointed that nothin' he can do'll make him feel rich—not rich like Mis' Wilson was when she give her tent when Grampa died. I ain't tryin' to preach no sermon, but I never seen nobody that's busy as a prairie dog collectin' stuff that wasn't disappointed.” (XVIII, 282)

だが、ジョード一家にとっては、たとえこうした現実をいくら耳にしたところで、今さら引き返すことも出来ず、ただ西へ向かって進むしか道はなかったのだ。その上、途中から合流し、互いに助け合うことで心の連帯を築き上げてきたウィルソン夫妻とも別離の時を迎える。妻のセアリーの病がひどくなり、これ以上先に進めなくなってしまったからである。そして、セアリーにお祈りを頼みこまれて、ケイシーは、「おれのお祈りなんか、何の役にもたちゃっしねえ」¹² と辞退し、「おれには神さまなどねえんですよ」¹³ と逡巡して断わろうとしたが、またしても頭を垂れ、祈りの形をとらざるを得なかった。

He shook his head as though to awaken himself. “I don' understand' this here,” he said.

And she replied, “Yes—you know, don't you?”

“I know,” he said, “I know, but I don't understand'....”

(XVIII, 298)

だが、飢えに苦しむ人々の窮状を見聞きするにつけ、ケイシーのこうした「祈り」への疑問は増すばかりであった。

(6)

こうして、ジョード一家は更に西へ向かった。モハーヴィ砂漠を走っている時、ジョン伯父がケイシーに話しかけた。

ジョン伯父は、若いころ誤って妻を死なせてしまったことを、一時も忘れることが出来ず、いつも重苦しい罪悪感に苛まれている人間で、ついに思いあま

って、かつて説教師だったケイシーの見解を求めたのである。それに対して、ケイシーは、罪というものに対する自分の考えを総まとめするかのように、決然として言った。

“Sure I got sins. Ever’body got sins. A sin is somepin¹ you ain’t sure about. Them people that’s sure about ever’thing an’ ain’t got no sin—well, with that kind a son-of-a-bitch, if I was God I’d kick their ass right outa heaven! I couldn’ stand ‘em!”
(XVIII, 306)

けだし、人間はすべて罪人なのだ。ただ、それは、人間が神の如く完全でありえないという意味で、である。心の内において、善と悪への衝動が常に葛藤を繰り返す存在だという意味で、である。だが、ケイシー自身の間人観は、すでに、ペシミズムからオプティミズムへと大転換しているのだ。

“Well,” said Casy, “for anybody else it was a mistake, but if you think it was a sin—then it’s a sin. A fella builds his own sins right up from the groun’.”
(XVIII, 306)

ここでケイシーは、「罪」「a sin」と「過ち」「a mistake」とを峻別して考えた。人間はすべて、いわば「過ち」の固まりなのだ。「過ち」は一時的な現象である。だが「罪」は存在のあり方の問題なのだ。大なる生命の一部である個々の人間が、その生命の躍動を停止させることこそが「罪」なのだ。ジョン伯父が妻を死なせたとしても、それは過ちにすぎない。だが、おっかあが、「あなたの罪で他の人たちを苦しめるのはお止めなさい」¹⁴ と言い、またおやじが、「人にしゃべるとほっとした気持になるもんだが、ただ自分の罪をまき散らすだけでだ」¹⁵ と言ったように、過度の自己卑下や多くの人々を不快にさせること、それが「罪」なのだ。大なる生命が、個々の魂を通して流出し、個々の魂がおのずから躍動するところに、「罪」などあり得ようか。個々の人間が、大なる生命の流れを我がものとして生きている時、それは神聖なことなのだ。

だが、こうした人間の内なる問題と同時に、人々の魂の躍動を奪い取ってしまう飢餓という現実問題が、ケイシーの心に覆いかぶさって来ているのだ。フーヴァーヴィルのキャンプで、ケイシーはトムに向かって、次のように言っている。

“I use ta think that’d cut ’er,” he said. “Use ta rip off a prayer an’ all the troubles’d stick to that prayer like flies on flypaper, an’ the prayer’d go a-sailin’ off, a-takin’ them troubles along. But it don’ work no more.” (XX, 340-1)

そして、「お祈りで豚のわき肉が現われたためしはねえからな」¹⁶ というトムという言葉に対して、すかさずケイシーは言葉をつけ加える。

“An’ Almighty God never raised no wages. These here folks want to live decent and bring up their kids decent. An’ when they’re old they wanta set in the door an’ watch the downing sun. An’ when they’re young they wanta dance an’ sing an’ lay together. They wanta eat an’ get drunk and work. An’ that’s it —they wanta jus’ fling their goddamn muscles aroun’ an get tired...” (XX, 341)

今や問題は明らかになった。飢えた人々の腹を満たすものは食物なのだ。まず食物を手に入れ、そしてまともな暮らしを保証するだけの賃金を得ることが焦眉の急なのだ。

ケイシーは、いよいよこの問題を、自分なりに解決しなくてはならないと感じた。それ故、今まで、ジョード一家に物質的負担をかけるばかりで、何の役にも立てなかったことを重荷に思っているケイシーとしては、この際、一人別れて行き、仕事を手に入れてその償いをしようと思うのだった。

そうした時に、仕事請負人がやって来て、近くに果物摘みの仕事があると言った。だが、その請負人のカラクリを知っているフロイドが、免許状を請求すると、紛争を煽動しているという口実で保安官補がフロイドを逮捕しようとしたのだ。フロイドはすきを見て逃げ出したが、それを追う保安官補にトムは足を掛けて倒す。そして、男たちの群の中から進み出て来たケイシーが、その男の首を蹴りつけ、昏倒させてしまった。そして、ケイシーは、トムとアルにその場から逃げ出すよう説得する。調べられると、トムが仮釈放の誓約を破ったことが露見するからである。こうして、ケイシーは、トムの身代りで逮捕され、車に乗せられて去って行くのである。その時のケイシーの表情は興味深い。

Between his guards Casy sat proudly, his head up and the stringy muscles of his neck prominent. On his lips there was a faint smile and on his face a curious look of conquest. (XX, 364)

何故、「誇らしげ」だったのか。何故、「顔には不思議な征服者の表情があった」のか。それは、言うまでもなく、ジョード一家への恩返し、思いもよらぬ形で実現したことへの満足感であった。だがそれのみならず、いよいよ自己の思想を実践する場を得たことへの喜びでもあったのだ。

(7)

その晩、フーヴァーヴィルは焼払われたが、その前にそこを逃れたジョード一家は、ウィードパッチの国営キャンプにたどりつく。ここの運営は住民の自治に任されていて、警察は、理由なく立入ることは出来なかった。例えば、土曜日のダンスパーティの際、警察が騒動をしくみ、治安の乱れを理由に強制捜査を企てたが、人々が協力して騒動を未然に防ぎ、警察の企てを打破った、というような事件もあった。

ジョード一家は、この国営キャンプに一ヶ月ばかり滞在したが、トムが五日間仕事にありつけた以外、相変わらず仕事は見つからず、北のピックスレーのフーパー農場へと向かうことになる。その農場の門の近くで、騒いでいる人々がいたが、ジョード一家は保安官に守られて農場に入る。そして、やっと桃摘みの仕事を心得、ジョード一家は、一箱5セントの賃金にて一日働くことが出来たのである。その日の仕事を終えたトムは、来る時見た農場の門の外での騒ぎが気になって様子を見に出かけるが、橋の下のテントの前を通りかかった時、トムは思いもかけない人物に出くわす。テントの中から、あのケイシーが顔を出したのである。

ケイシーは、刑務所の中での体験を語った。

“Here’s me, been a-goin’ into the wilderness like Jesus to try find out somepin. Almost got her sometimes, too. But it’s in the jail house I really got her.”
(XXVI, 521)

刑務所の中にいる大部分の連中は、多くの場合、生きてゆくのに必要な生活必需品を盗んで放り込まれた人間たちだった、とケイシーは言う。

“Well, they was nice fellas, ya see. What made ’em bad was they needed stuff. An’ I begin to see, then. It’s need that makes all the trouble....”
(XXVI, 521)

ケイシーは、また他の体験を語る。ある時、酸えた豆を与えられて、一人がわめいたが何も起こらなかった。だが、一人また一人と次第は増えて、みんなが声を合わせてわめき始めると、とうとう別の食物を運んで来た、というのだ。そしてこの体験は、ケイシーに決定的な影響を与えた。というのは、実はこの時ケイシーたちはストライキの真唯中にいたのである。はじめ、このフーパー農場へ働きに来た時、賃金は5セントだということだった。しかし、仕事を求める人間が増えてくると、雇用者は2セント半しか払わないと言い出した。そこで抗議をすると追い出されたので、こうしてストライキをやって抵抗しているのだ、とケイシーは説明した。ところが、農場内で今働いているトムたちには5セントが支払われていることを知ったケイシーは、農場内の仲間たちに事情を話して、ストライキをやるように働きかけてくれ、とトムに頼む。ケイシー達のストライキが限界に近づいていて、これが失敗すれば、すぐに賃金が2セント半にさがるのは目に見えているからである。だが、飢えている連中がこの話を理解するとは思えないと答えるトムの言葉に、ケイシーは悲しげにつぶやく。

“I wisht they could see it. I wisht they could see the on’y way they can depen’ on their meat—...” (XXVI, 524)

そして続けて、刑務所の中でのもう一つの体験を語る。ある男が組合をつくろうとした。結局自警団の連中につぶされたのだが、驚いたことに、男が救ってやろうとしたその仲間たちが、逆に恐れをなして、「危険人物」として、その男との係わりを避けたというのだ。ただ、それは「雨が降るのと同じくくれえ自然なことなんだ」¹⁷と言ったその男の言葉を、ケイシーはつけ加えるのを忘れなかった。

こうして話している間にも不穏な気配を察し、仲間たちはテントの外に出て避難しようとする。ケイシーは、ストライキの指導者として追われているのだ。近くの橋げたの下まで来た時、男たちに懐中電灯で照らし出されたケイシーは、彼らに向かって話しかけた。

“Listen,” he said. “You fellas don’ know what you’re doin’. You’re helpin’ to starve kids.” (XXVI, 527)

こう言った時、一人の男のつるはしの柄がケイシーの横面を襲い、こうしてケ

のような普遍的求道者だったと言ってもよいだろう。確かにこの『怒りのぶどう』は、ストライキ小説として読むより、しばしば論じられてきた、旧約の「出エジプト記」を基にした聖書の構成を念頭において読む方が、はるかに大きな感動を与えてくれる作品である。

ともかく、ケイシーは道半ばにして死んだ。だが、その魂は決して死んではいないのだ。それは、彼自身の創造した人格と思想とが、トムという人間の中に再生してゆくからである。確かに肉体は滅びた。だが、人々と共に苦しみ、人々の味方となって連帯の中に生きたその証は、消滅することなく、新たな装いをもって生き続けるのである。あのおっかあ、あのトムに向かって語ったその言葉のように――

“...Why, Tom, we're the people that live. They ain't gonna wipe us out. Why, we're the people—we go on.” (XX, 383)

〔註〕

1. 以下、テキストには
John Steinbeck, *The Grapes of Wrath: Text & Criticism* (New York: The Viking Press, 1972)
を用い、各引用文のあとに、その章と頁を記すことにする。また、本文中への引用には、岩波文庫版『怒りのぶどう』（大橋健三郎氏訳）の訳を借用した。
2. "...maybe they liked to hurt themselves,..." (IV, 31)
3. F. I. Carpenter, "The Philosophical Joads" (上記テキストに収録) 参照。また、ジム・ケイシーの創造には、R. W. エマソンの思想が大きな影響を与えていると思われる。この両者の比較は、極めて興味深いテーマである。
4. "the naked honesty" (IV, 33)
5. スタンイベックの生物学的人間観からすれば、「魂」は「生命」の一形態と考えてもよいであろう。
6. "And on the preacher's face there was a look not of prayer, but of thought; and in his tone not supplication, but conjecture." (VIII, 109)
7. 一例をあげておく。
"The greatest delight which the fields and woods minister is the suggestion of an occult relation between man and the vegetable. I am not alone and unacknowledged. They nod to me, and I to them. The waving of the boughs in the storm is new to me and old. It takes me by surprise, and yet is not unknown."—R. W. Emerson, "Nature"
8. "She watched him as though he were suddenly a spirit, not human any more, a voice out of the ground." (VIII, 111)
9. この作品が出版されて、「猥褻文書」という理由で、禁書にしたところもあった。
10. "An' if ya listen, you'll hear a movin', an' a sneakin', an' a rustlin', an'—an' a res'lessness." (XVI, 237)
11. "The more fellas he can get, an' the hungrier, less he's gonna pay." (XVI, 259)
12. "My prayers ain't no good." (XVIII, 297)
13. "I got no God,"... (XVIII, 298)
14. "Don' go burdenin' other people with your sins." (XX, 365)
15. "It gives a fella relief to tell, but it jus' spreads out his sin." (XX, 365)
16. "Prayer never brought in no side-meat." (XX, 341)
17. "Jus' as natural as rain." (XXVI, 525)